名桜大学紀要，(21)：109-119（2016）

【調査報告】

名桜大学ライティングセンターの挑戦
―― 設置準備と他大学視察を中心に ――

The Challenges of Meio University Writing Center:
Focusing on Preparation Process and Visit Reports

菅野　敦志，真喜屋美樹

要旨

本稿は，本学のライティングセンターワーキンググループが発足した2014年後期から，センターが設置された2015年前期までを範囲とし，特に他大学視察の実施により収集した全国および海外のライティングセンターの取り組みと現状を中心に紹介するものである。視察の結果，書き手自身が自ら文章の問題点に気づき，修正し，内容を深められるように導くための「自立した書き手を育てる」という理念の重要性が共通して確認できたと問時に，「ライティングセンターの機能的な運営，利用率向上のために特に求められる点」が，チューターの育成（指導レベルの向上と維持），科目との連携，ライティングセンターの役割に関する学内周知，であることが明らかになった。

キーワード：ライティングセンター，ピア・チュータリング，設置準備，大学視察

Ⅰ．はじめに

近年日本の大学で教育の質保証が叫ばれて久しい。学生の学力向上の方策については，学習支援という枠組みの中で，多くの大学で様々な改革が試みられてきたが，なかでもこの10年で大きな注目を集め，脚光を浴びることになったものの一つに学生の「書く力」の育成とライティングセンターの導入があろう。

ライティングセンターはアメリカの大学で1950年代に生まれ，1980年代頃から全土に広がったといわれる。日本では，レポート・論文の作法など，大学で身につけておくべきコミュニケーションスキルの一つである「書く力」の習得をサポートする場所として，早稲田大学のライティングセンター（2008年開設）を筆頭に，この10年で徐々に見受けられるようになってきている。そのようななか，名桜大学ライティングセンター（MWC）は，「専任教員を擁する」センターでは沖縄県内初として2015年４月に設置され[1]，リベラルアーツ機構（旧：教養教育センター）の下にあるLLC（言語学習センター）やMSLC（数理学習センター）といった本学の既存の学習支援センターに加えて，新たな教育支援の試みがなされることとなった。

本稿では，本学のライティングセンターワーキンググループが発足した2014年後期から，センターが設置された2015年前期までを範囲とし，特にセンター設置前後に実施された他大学の視察から収集した全国および海外（アメリカ・ハワイ）の著名なライティングセンターの取り組みと現状を中心に紹介してみたい。同分野に関する論考は少なくないものの，大学間比較を中心とした報告は決して多くないことから，それらの情報は今後新たにライティングセンターを設置予定の大学にとっても有益であり，本稿が果たすことのできる意義は少なくないであろう[2]。

Ⅱ．ライティングセンターワーキンググループの発足

本学におけるライティングセンターは，大学教育（学士力）の質保証が叫ばれている昨今において，まずは母語で物事を的確に表現し，伝える力としての「書く力」を鍛え，一生涯にわたって必要とされるコミュニケーションスキルを確実に習得させることで，教育の質保証と社会からの要請の両方に応えるために設置が目指された[3]。

設置の流れとしては，2014年10月９日，山里勝己学長の指名により５名のメンバーで名桜大学ライティングセンターワーキンググループ（以下WGと略称）が発足した[4]。WGでは学長からの答申を受け，10月14日から11

月４日までの間に５回の会議が設けられ，ライティングセンター設置に向けた議論が進められた。

当時，沖縄県内では専任教員を擁するライティングセンターはまだ存在していなかった。この点において本学は県内で「初」を称することとなったが，しかし，そうであっても全国的には後発組であり，ゼロからの出発であった。新たなライティングセンター立ち上げに際しては，既存のセンターの現状を知り，新規性を打ち出すためにも真っ先に実施する必要があったのが他大学の視察であった。そのため，委員長の菅野が2014年10月に早稲田大学，上智大学，国際基督教大学，大阪女学院大学，関西大学に設置されているライティングセンターの視察を行った。

上記の各大学ではそれぞれ独自の取り組みを展開されており，多くの示唆を得た。以下，各大学のライティングセンターの概要と特徴について列挙して紹介する。この視察では，ゼロからの立ち上げに際して，組織面・運用面での現状把握を第一の目的としたため，教員よりもむしろ事務方の職員の方々を中心に聞き取りを行った。

Ⅲ．関東圏大学の視察―早稲田大学，上智大学，国際基督教大学

①早稲田大学ライティングセンター[5)]

【設置経緯と体制】

文部科学省の現代GPが嚆矢となり，ほぼすべてのレポートを英語で書かせる国際教養学部の学生向けにライティングセンターが置かれた。その後，全学のための独立した組織としてライティングセンターが設置されたのは2008年である。職員の方のご説明では，同組織の体制構築と運営において，ライティングの専門家として採用された佐渡島紗織先生が中心的役割を担われているとのことであった。同教員が中心となって構築された体制で実働部隊となっているのは，助手と大学院生からなるチューターである。

【利用方法と指導員】

ライティングセンターの予約は当日まではオンライン予約でのみ受け付け，当日予約は直接センターで対応する。予約なしでも当日チューターが空いていればセッションを受けることは可能。利用は学部生だけでなく，大学院生，教員に対しても開放している。チューターが検討する文章は「アカデミックな目的で書かれた文章」で，それらは，「語学授業の課題，専門分野のレポート，卒業論文，修士論文，博士論文，投稿論文，研究計画書など」である。使用言語は日英の両方に対応。

チューターは通常の「教務補助」よりもワンランク上の「教育補助」として雇用している[6)]。チューターは大学院生であり，学内すべての研究科から募集する。応募に際しては，日本語文章担当の場合は「学術的文章の作成とその指導」，英語文章担当の場合は，これまでに在籍していた機関で「アカデミックライティング」の科目を履修済みであることが求められる。

文章審査，面接審査を通過した者が教務補助チューターとして採用される。教育補助チューターになるには，その後独り立ち審査，教育補助審査を受ける必要がある。毎週90分間の全員研修があり，常時20-40名程度が勤務している（人数は学期，年度によってもばらつきがある）。対応時間は以下の通りである。

【対応時間】（予約制，当日は空いていればウォークイン可）１セッション45分，月～金10:40-17:15。（昼休みも利用可）

利用者がライティングセンターに来ると，受付で「ウェルカムシート」を記入し，チューターが紹介され，ブースに入る。文章や課題の検討を45分間のセッションで行った後，利用者はアンケート用紙に感想を記入し，ポストに入れて終了となる。

【専任教員の役割と意義】

佐渡島紗織先生のご尽力により，本学のライティングセンターの体制は現在では年間で4000回の利用を数える日本有数のライティングセンターに成長を遂げることとなったという。日本の大学でライティングセンターがほぼ皆無に等しかった頃から，佐渡島先生がほとんどお一人でここまで組織を大きくされてこられたので，専門的にかかわってくださる教員の存在と役割は非常に大きいとのことであった。

もし，図書館関連の業務として先に発足していた場合は，ラーニングコモンズの一環として図書館内に設置された可能性もあったとのこと。しかしながら，アメリカの大学院を修了され，ライティングセンターの事情に精通した同教員の存在なくして，職員中心で同様の組織を立ち上げることは困難であった点を職員の方は繰り返し強調されていた。

【科目との連携】

早稲田大学の場合は，ライティングセンターは支援機関であり，授業とは独立した位置づけにあるため，利用の有無が授業の成績に影響することはない。とはいえ，様々な形で授業との連携をとることはきわめて重要である。

例えば，文学部の初年次教育である「教養演習」のなかでレポートの書き方についての指導がある。同科目では学術的文章の作成について，「書く力，書き上げる力」を養うことに主眼が置かれている。また，全学共通科目としてグローバルエデュケーションセンターが設置している「学術的文章の作成」（オンデマ

ンド授業，８回，１単位）では，毎回400～800字の文章が課される。そのような科目では教員がライティングセンターに行くようアナウンスしてくれており，教員や科目との連携を通じてセンターの存在を宣伝することは非常に重要である。

課題の一環としてライティングセンターを利用する場合には，担当教員との事前の相談を行い，利用者の集中を避ける処置をとるなど，うまく連携をとることが重要である。授業で義務付けられたことで利用したが，利用したことの成果を実感し，その後の利用につながるケースも少なくないため，自発的な利用だけでは利用者数は伸びない恐れがある。

【指導に関して（文系理系の違いなど）】

ライティングセンターは，課題提出前に文章を添削して完璧に仕上げる場ではなく，書き手とともに一緒になって考える場としての理解が重要である。また，学部単位ではなく，全学共通で利用する機関であり，チューターになる者の学問的な専門も多様であることから，一読者としてアドバイスできることが重要である。専門分野における慣習を知っていれば望ましいものの，違う専門であるからこそつい見落としがちな指摘も可能となる場合もある。参考文献の書き方などについては近くにすぐ手にとれる参考書があると解決につながりやすい。

【学習指導の効果・影響】

文章作成に関する相談は対応に時間がかかることから，１人の教員に対する学生の比率が高い早稲田大学のような大規模校においては，教員の負担軽減という点でおおむね歓迎されている。

しかし，これは教員の負担軽減ということだけではなく，学生がチューターと個別に自らの文章作成を振り返る場として自らが多くの気づきを経て成長していくことのできる重要な学びの機会でもある。チューターからの指導を受けた学生が，今後は自らが訓練を受けてチューターになることもある。受け身として利用していた学生が今度はサポートする側にまわるようになるなど，ライティングセンターは利用者と指導者双方にとって，学生の力をともに伸ばすことのできる画期的な場所であるといえる。

②上智大学国際教養学部ライティングセンター[7)]

【設置経緯と体制】

国際教養学部はそもそも国際部，比較文化学部という日本において英語で学ぶことのできる学部として長い伝統を有している。教員もアメリカで教育を受けた者が多いこと，非母語者へのライティング指導への要請が高かったことなどもあり，国際教養学部のライティングセンターは2004年に文部科学省による教育GPに採択されたことで開設され，ロバート・ウィットマー教授が中心的役割を担われているとのこと。

センターは嘱託職員２名が交代で管理し，大学院生だけでなく，卒業生などを契約職員としてチューターに採用して指導をお願いしている。なお，同大学には別組織である上智大学LLCライティングセンターも存在するが，紙幅の都合上割愛させていただく[8)]。

【利用方法と指導員】

受講対象者は国際教養学部（英語）の学生のみ。国際教養学部は英語だけを教授言語としているため，英語の非母語者に対するライティング指導が多い。ライティングセンターは予約制で，センターに直接来てリストに記入してもらう。１セッション45分。もし次の時間が空いていれば終了後ただちに申し込んで続ける形となる。対応時間は以下の通りである。

【対応時間】（予約制）１セッション45分，月～金10:15-16:00。

ブースは４つあり，学生が使用可能なPC ２台とプリンターも設置されている。学期始めは課題がまだ出されないため利用者は少ないが，学期半ばに中間試験（mid-term exam）課題が出ると利用者は一気に増加する。

【科目との連携】

ライティングについてはアカデミックライティングの科目があり，連携をとっている。その他にも，学生がライティングセンターを利用すると加点（extra credit）を与えるという方針の教員もいるため，半期で400～500回ほどの利用がある。

毎日のようにセンターを利用する学生もいれば，１度来てそれきりとなる学生もおりタイプは様々であるが，しかし，１度でもセンターに足を運んでもらえると次につながる可能性が高くなるため，科目との連携をとってまずはセンターを学生に利用させることが非常に重要であるという。

【指導に関して（文系理系の違いなど）】

国際教養学部ではリベラルアーツの方針の下で専門をそれほど強く意識していない。また，形式的な添削ではなく，内容について一緒に考えてアドバイスする形をとっているため問題は特にない。

【教員への説明】

教員にとっては教育的負担の軽減となるためライティングセンターは歓迎されており，その必要性に対する理解は相当なものである。そのような理解を得て運営されていることから，１学部のためのセンターとしては充実した環境を揃えることができている。

③国際基督教大学(ICU)ライティングサポートデスク[9)]

【設置経緯と体制】

ICUではライティングサポートデスク（WSD）と称している。英語でアカデミックスキルを学ぶことが必須であるため，英語でのアカデミックライティングサポートは必要であった。特に，アメリカの大学ではそのようなサポートは一般的であることから，日本の大学にも必要であるとの大学側の判断があった。組織については図書館の既存の体制のなかで進めるよう大学側から指示があり，立ち上げの際は特に早稲田大学ライティングセンターの佐渡島先生から多くのご助言をいただいたという。今でもWSDの運営には佐渡島先生のご研究が最も参考とされている。

オスマー図書館地階がWSDエリアであり，2010年の冬学期から教養学部長室と図書館が共同で運営を開始した。WSDには特定の教職員は貼り付いておらず，４名（１名増員予定）の図書館レファレンスサービス担当職員で対応している。通常は大学院生のチューターを配置しているが，学部生でも優秀な学生は教員の推薦を受けて採用している。

【利用方法と指導員】

ICUでは英語の比重が高いため，英語の文章指導が多いが，日本語の文章にも対応している。WSDは予約制で，指導するのは大学院生である。対応時間は以下の通りである。

【対応時間】（予約制）１セッション40分，月～金9:00-17:20。

【科目との連携】

主に英語プログラムでのアカデミックライティング科目をサポートする役割を担っているが，日本語での文章作成のサポートにも対応している。早稲田大学の佐渡島先生による「車の両輪」理論（センターと科目は，車の両輪のように両方を一緒に連動させなければうまく進まない）は極めて重要であり，科目とWSDは十分な連携がとれていることが不可欠との認識であった。

【指導に関して（文系理系の違いなど）】

ICUの教養学部は３年次からメジャー（専攻）に進むことになっており，リベラルアーツの大学として基礎的な部分において共通の学びを経るとはいえ，自然科学系の教員からのリクエストには十分応えられていない部分もあり，今後検討が必要とのことであった。

【教員への説明】

教員のなかにも取り組みに対して反応が分かれる向きがあったことから（専門にかかわる教育・指導について干渉されるのではないかという不安），なぜこのようなサポートが必要かを丁寧に説明することが肝心であったという。「ライティングのサポートを全学的に行うことにより教員負担が軽減される」という共通認識が共有されることが取り組みの成功につながるとのことであった。

Ⅳ．関西圏大学の視察―大阪女学院大学，関西大学

①大阪女学院大学ライティングセンター[10)]

【設置経緯と体制】

同大学は英語を学ぶ大学として，当初から「英語で書くこと」が教育の特色であったことから，英語文章指導を目的としたライティングセンター設置は当然の成り行きだったという。授業時間内だけでは指導が十分でない場合が多いため，自習の一環としてライティングセンター（デスク）を設置した。小規模大学であるため，ライディングセンターという名称にはなっているものの，実質的にはSASSC（サッシー：Self Access & Study Support Center＝学習サポートセンター）内に設置されているデスクを指すものとなっている。ライティングセンターのデスクは他のチュータリングを行うチューターによる学生指導のデスクとの共同で使用している。

専任教員はおらず，複数教員による他の委員会の下で管理している。チューターは短大卒業生で，他の著名な４年制大学に編入した者などが学生の相談全般に応じている。このときにライティングに関することも学業全般の範囲で相談に応じたりしている。

【利用方法と指導員】

同大学では英語に特化して学ぶため，ライティング＝英語の文章となる。予約制で，指導員は退職された教員など，指導経験豊富で面倒見のよい外国人教員（英語ネイティブ）１～３人に依頼し，非常勤の形態で契約を結んでいる。毎日学生の予約に対して教員１人が担当し，対応時間は以下の通りである。

【対応時間】（予約制）月，火，水，金：16:00-19:00（木は休み），土：13:00-16:00。

【科目との連携】

ライティングについては１年次から４年次まで英語のライティングの必修科目があり，ライティングセンターは同科目をサポートする役割を担っている。同科目で使用する教材については以前からすべて教員による手作りの教材を使用しているため，「この教育方法で実施する」意志が明確となっており，それに対して異論を唱える教員はいない。

【指導に関して（文系理系の違いなど）】

同大学は国際・英語学部として英語教育に特化した単科大学であり，教員間でコンセンサスがあるため調整する困難は特にない。

【教員への説明】

同大学は当初から教育型大学として設立･運営され，書くことに力を入れてきたので教員は最初から一般の専門教育を教える教員よりも負荷が高いことを理解している。

②関西大学ライティングラボ[11)]

【設置経緯と体制】

関西大学のライティングラボは，2010年からの文学部でのGPプロジェクトの取り組みから始まり，その後拡大を遂げ，2012年からは津田塾大学との共同プロジェクトとして文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」「〈考え，表現し，発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」（５年間）の補助を受け，現在の組織を設置している。

補助金の交付をもとに，特任教員（助教）３名，ラボの事務員１名，大学院生TA23名で運営している。所属は教育推進部・教育支援グループであり，大学本部の教職員も多数運営に携わっている。大学院生のTAは現在20名以上在籍している。学生の直接的な指導はTAが行い，特任教員は教員や各箇所のコーディネーターやTAのトレーニング，ライティング講座の企画・実施，報告書作成などを担当している。

【利用方法と指導員】

ライティングラボでは，アカデミックライティング以外にも，様々な文章の作成支援に応じている。ただ，研究に関する専門的な内容の相談は指導教員に，就職活動のエントリーシートや履歴書などの書き方（就職支援）はキャリアセンターに行って相談するよう指導している。

TAはあくまでも「相談学生の気づきを促す相手」であり，その点について「大学院生のTAが一緒に考え，個別にアドバイスします」，「TAは添削指導や書き直しを行うのではなく，みなさんと一緒に考えます」，と利用案内に明記することで誤解が生じないように努めている。

ライティング指導は日本語の文章のみ。まだ英語のライティング指導は業務内容に含まれていないが，将来的な目標として設定しているとのこと。予約制で，ウェブでのオンライン予約，もしくはラボに来室しての予約が可能。TAは大学院博士後期課程の院生が担当し，「定時事務職員」として雇用している[12)]。TAのトレーニング期間は，集中的に行えば１カ月，長い場合は２カ月ほどかけている。募集は学期ごとに行っており，短い人は半期だけで辞めるが，長い人では３年ほど継続雇用している。対応時間については以下の通りである。

【対応時間】（予約制）１セッション40分，月～金11:30-17:00。利用案内には「１回40分の相談でみることのできる分量は800～1200字です」と明記している。

【場所の特徴】

TAが指導する部屋はラボの事務所の真下の階にある。部屋には学生と一緒に座って指導する時に座る楕円形のテーブルが幾つか置いてあるが，パーテーションで仕切られてはいない。仕切りを設けない効果としては，開放的な場･空間としての印象を与えることと，TA自身が学生からの質問に対してどのように答えてよいかわからなかったり困ったりした際に他のチューターに気軽に声掛けして聞くことができるようにするためである。部屋にはTAが困った時にすぐ手に取ってみることのできる参考文献が揃えてある。

【津田塾大学との連携】

2012年に採択された文部科学省大学間連携共同教育推進事業により，津田塾大学と連携して事業を進めている。連携の具体的な方法としては，①海外の先進的な取り組みについての調査と紹介，②チューター・TAの指導者としてのスキル向上，教材開発・教育支援を目的とした合同FD／SD研修会の実施，③遠隔システム（テレビ会議）を用いた合同講演会の開催，などである。

【科目との連携】

ライティングラボはあくまで「ライティングをサポートする場」という共通認識を共有することが非常に重要である。科目との連携については，初年次教育科目「スタディ･スキルズ」,「文章力をみがく」といった科目でガイダンスやミニ講義も実施している。ラボの方でも宣伝はしているが，やはり教員の影響力は絶大で，授業との連携が最も重要である。そのため，積極的に教員側にアプローチし，こちら側がどのようなサポートができるかを伝え，話し合って，お互いに協力体制を構築する必要がある。

【指導に関して（文系理系の違いなど）】

約３万人近くの学生が在籍する総合大学であるため，様々な学問分野を学ぶ学生がおり，文章のスタイルや体裁についても当然差異はある。しかし，ライティングラボは文章の体裁の指導ではなく「論理的な文章とは何か」ということについて学生とともに考える場所であることから，各専門分野に関する詳細な指導については担当教員や指導教員から指導を仰ぐよう説明している。

【教員への説明】

ライティング支援部署の立ち上げは，明らかに教員の教育負担を軽減するものであるので，多くの教員からはおおむね歓迎されている。ただし，教員の教育に

関する熱意の温度差もあるため，ラボにおいてできる／できないことを教員に説明することも重要である。

Ⅴ．WGの成果とMWCの設置

上記以外にも，沖縄県内の事例については，小嶋WG副委員長が2014年10月に沖縄国際大学のライティング事業を視察され，同調査からも，沖縄県内の大学でセンターの専任教員を擁する独立したライティングセンターが実質的にはまだ存在せず，本学が先駆けとなって県内のライティング教育を牽引すべきことも再確認された。

WG発足当初の視察では，日本国内における先進的な取り組みを行われてきたライティングセンターを訪問し，その経験を学ぶことで本学にとっての実現可能性について多くの示唆を得ることができた。特に，ライティングセンターには使用言語によって，①英語ライティング，②日本語ライティング，③日英両方ライティング，の３系統に分けられるが，まず本学が目指すセンターは，当初においては②に該当する系統を優先する形で設置が進められることとなった[13]。

WGは12月２日に学長に答申書を提出してその任務を終えたが，引き続きWG委員がそのまま引き継がれる形でライティングセンター運営委員会が発足し，センター設置に向けた準備が進められた。当初から喫緊の課題としてあげられていたのは「センター専任の教員採用」であった。学習支援センターとしてLLC，MSLCと同列の扱いとなるMWCの設置に際しては，他箇所と同様に専任の教員を採用し，2015年春期からセンターの運営を担っていただくことが必要不可欠であるという点で委員全員の見解の一致がみられた。そして，2014年の年末に行われた公募により，真喜屋美樹准教授が採用された。

2015年４月１日，名桜大学ライティングセンター（MWC）が設置されると[14]，各種の規定が定められた。前職の都合上，真喜屋准教授は６月１日に着任され，学生チューターを主体とするセンターの運営体制構築に向けた準備はここから本格始動することとなり，その正式運営開始予定は翌年の春と決定された。

Ⅵ．MWCの設置後の大学視察―早稲田大学，創価大学，関西大学

2015年春にMWCが発足したとはいえ，MWCセンター長である菅野と同様に，センター専任教員の真喜屋准教授もライティングセンターでの実際の運営経験を持ち合わせてはいなかった。そのため，専任教員着任後の2015年６月に両者は国内の先進事例視察を目的とした視察（早稲田大学，創価大学，関西大学）を行った。

前回の視察では，立ち上げと準備のための情報収集を目的としていたため，職員の方を中心に聞き取りを行ったが，今回の視察では，運営面の工夫だけでなく，特に①チューターの活動・育成，②科目との連携等の２点に焦点を当てて聞き取りを行った。以下，各大学での取り組みとその概要を紹介する。

①早稲田大学[15]

【概要】

早稲田大学ライティングセンターの概要については既述の通りであるが，チューターとなる大学院生，ポスドク，助手は，学生以外に教員も対象とし，領域を横断して文章指導を行っている。同センターが対象とする文章は，授業のためのレポートはもとより，論文（卒論，修論，博論等），奨学金や研究補助金を申請する研究計画書などで，これらの文章指導を，日本語，英語，中国語で行うことができる。これは，同センターのチュータリングレベルの高さを物語っており特筆すべき点と言えよう。

【チューターの採用】

チューターは，文系に限らず理工系の研究分野を背景に持つ者もおり，センターのディレクターを務める佐渡島紗織教授が担当する大学院生対象の科目「学術的文章の作成とその指導」の受講生の中から成績上位の学生が選抜される。こうした仕組みにより，高いライティングスキルを持つ人材の確保が可能となっている。

【チューターの訓練】

チューターの高いスキルを維持しさらにブラッシュアップするために，週に１度，チューター主導によるチューターミーティングが実施されている。ミーティングでは，個々のチューターが持つチュータリング手法を相互に学びあうためのShort paper diagnosis（短い文章の問題診断）を行ったり，ライティングセンターの理念をグループワーク形式で確認することにより，ピアラーニングの姿勢を学び直したりするなど工夫を凝らしたトレーニングを実施している。

【セッション記録のアーカイブ化】

チュータリングを受ける側の了解を取ったうえで，年に数回，時期を設定して実際に行なわれるセッションを録音してアーカイブ化し，チューターのトレーニングにも活用している。録音はいつでも聞くことができ，①質問の工夫，②書き手が困っている点の見逃しはないかの確認，などに役立てているという。さらに，録音から逐語録を作成し，活字になった内容を全員で検討する。セッションのアーカイブ化はチューターのスキルアップに効果的であり，このような研鑽の積み重ねによって培われたノウハウを持つチューターの的

確なアドバイスは，書き手自身が文章を診断・修正し，内容を深めることへと確実に結びついている。

早稲田大学ライティングセンターでは，チューター選抜の時点から高度な人材を確保する仕組みが確立されており，実際に文章指導が始まってからも，より効果的な指導方法を身につけるための充実した人材育成の仕組みが構築されていた。こうした早稲田大学独自の手法は極めて先進的であり，注目に値する。

②創価大学[16)]

【概要】

創価大学ライティングセンターは，学習支援のための空間であるラーニングコモンズSPACe内に設置されている。SPACeが所在する中央教育棟は，主に学部１～２年生の授業が行われる講義棟で，１日の平均利用者数は学部１～２年生を中心に2,000～2,500人と学内でも多くの学生が集う建物である。このため学生のアクセスがよく，SPACeは終日，学部生，院生，留学生に自由に利用され，「学びをサポートしあう空間」として機能していた。

ライティングセンターは，リメディアル教育としての学習支援を目的に運営されており，学部生のチューターが，持ち込まれた400～800字のレポートを診断してチュータリングを行う仕組みであった。

【チューターの訓練】

同センターでは学部生がチューターを務めていた。チューターに求められる文章診断のための技術として，「気がついたことを疑問文で聞く」，「パラグラフライティング，トピックセンテンス，段落の有無などのチェック」などの訓練が基本であり，この点は大いに参考になった。また，どのような人材がチューターとして適材かについては，①「教員からの推薦」，②「読み手の立場を考えてコメントできる」，③「自然なフィードバックが上手」の３点を重視し，チューター研修を通して確認しているとのことであった。

【教員・授業との連携】

センター利用促進のため，学部１年生必修科目「学術文章作法」と連携をとっている。１年生の必修科目との連携は，①低学年のうちにセンターの存在を知ってもらう，②センターへ通うハードルを下げる，の２点を狙いとしている。

【共通認識構築の重要性】

ライティングセンターが「どこまで，何をするところ」かを明確にし，この点について「学内で共通認識を持ってもらう」ことが運営上最も重要とのことであった。この背景には，ライティングセンターが，「書き手自身が自ら文章の問題点に気づき修正する力を育成する場所」であるにもかかわらず，多くの教員が「文章を朱筆添削する場所」と考えていることがある。したがって，ライティングセンターの理念を全学で共有することは，センターの運営には不可欠な要素となる。

③関西大学[17)]

【概要】

関西大学ライティングラボの概要については既述の通りであるが，新たな取り組みとして，2013年からは図書館内に設けられたラーニングコモンズ内のライティングエリアでも活動を展開している。

【チューターの訓練】

チューターは大学院生のTAが務めるが，TAは実際に学生の相談を担当する前に，独自で開発した導入研修を約１カ月間受ける。研修は，主に特任教員がファシリテーターとなって実施され，新規TAを養成する。

【教員・授業との連携】

既述のように，授業との連携については，視察の時点では特定の科目とは連携していないものの，ラボに関する資料を専任教員に紹介するなどして学生の利用促進を図っている。この結果，授業時間内のラボの利用ガイダンス実施件数や，科目担当教員から学生に対するラボの利用指示件数が増加したとのこと。

【利用促進のための工夫】

2014年度秋学期からは，レポート作成の過程でラボを利用した学生には「ラボ利用証明書」が発行されるなど，さらなる利用促進のため，授業との連携のための工夫は重要とのことであった。①ラボの存在を周知するための学内広報，②学部の教員との連携，の２点は利用率を上げるうえで効果的であったといい，このような工夫の結果，利用者数は年々着実に増加しているとのことであった。

Ⅶ．ハワイ大学ライティングセンター（マノア校・ウェストオアフ校）視察

上記の国内大学の視察に続き，同年７月にはライティングセンター運営委員および学習支援センター教員の合計４名は，琉球大学・名桜大学・ハワイ大学システムとのコンソーシアム協定(2015年５月)による，本学から同協定調印後として初のハワイ大学への視察が実施された。

ハワイ大学システムは３校の４年制大学と７校のコミュニティーカレッジを擁する。そのなかでも，今回の視察ではオアフ島にあるハワイ大学マノア校と同大学ウェストオアフ校を2015年７月23日と24日の両日を使って訪問・視察を行った。

①ハワイ大学マノア校ライティングセンター[18)]

【利用方法と指導員】

同センターは組織として英語学科の中に位置づけられている[19)]。センター長はジョージアン・ノードストロム専任講師で，チューターとのコーディネイトなどの実際の業務については大学院博士課程の学生が助手として対応しているとのことであった。

オンラインによる予約制。指導するのは主に大学院生が多いが，学部生もいるとのこと。対応時間は以下の通りである。

【対応時間】（予約制）１セッション30分，月～金9:00-18:00。

【目的と到達目標】

センターでは，チューターと以下の作業ができ，また目標に到達できることが明示されていた。

・課題で求められている事柄をよりよく理解する
・主題に関するアイデアを考え出す
・焦点となる議論を形作り，構築する
・首尾一貫したまとまりのある文章となるよう，考えをより効率よく整理する
・文章が明確になるよう推敲する
・文法や文章の型にかかわる事柄についての理解を明確にする
・文章執筆に有用な参考資料を見つける
・よりよい書き手，そしてより自信に満ちた書き手となる

注目したいのは，これまで実施してきた各大学の目標と極めて一致する理念として，チューターとともに到達できる目標の最後に掲げられた「よりよい書き手，そしてより自信に満ちた書き手となる」の一文である。マノア校はハワイ大学システムのなかでも研究指向型であり，ライティングの技能を向上させるための高度な目標が設定され，それをクリアしようとする姿勢が強く見受けられた。

【場所の特徴】

センターの広い空間はパーテーションで半分に区切られ，入り口から右半分はチュータリングを行う空間，左半分はチューターのための休憩や作業の空間として設定されていた。右手のチュータリング空間では机と椅子が幾つか置かれていたが，それぞれの机にはパーテーションが設置されていなかった。この点については，「チュータリングではまるで肩を寄せ合って原稿を一緒に覗き込むようにするため，隣の話声は耳に入ってこない」とのことであった。

【チューターに関して】

チューターは学生が選択可能。専任教員が注意されていた点は，チューターと指導を受ける学生は，特に回数を重ねると親密な関係になることが多いが，逆に特定のチューターに強い思い入れを抱くようになって接近するようになる学生も時に出てきてしまうことから，その際には助手が介入して注意することもあるとのことであった。

日本からは他にも関西大学や北海道大学からの視察を受け入れており，国際的な交流にも積極的な様子であった。国外の大学からも視察団が訪れるライティングセンターとして，非常に完成度の高い成熟したセンターであるとの印象を受けた。

②ハワイ大学ウェストオアフ校ノエアウセンター[20)]

【組織と体制】

同校では，ライティングは数学のチュータリングとともに，同校の学習支援センター「ノエアウセンター」(No`eau Center)[21)] の下で一つに統括されているため，マノア校のように独立したライティングセンターにはなっていない。それは，ライティングはあくまで学生が学ぶための基礎的な力を身につけるうえで必要な力の一つとして位置づけられている理由による。研究指向のマノア校とは異なり，ウェストオアフ校のミッションは「現地学生のための機関」(Indigenous serving institution）とのことであった。約2,600名という学生数は，学生数約2,000名でなおかつ学部生をチューターで採用するしかない本学と非常に共通点が多く，参考になる点が多かった。

オンラインによる予約制。大学院生の数が限られているため，指導にあたるのは学部生が中心とのこと。対応時間は以下の通りである。

【対応時間】（予約制）１セッション50分，月～木8:00-17:00，金8:00-16:00。

【利用に関して】

センターはブレインストーミングからあらゆる型タイプのライティングに対応し，就職活動のための履歴書の書き方指導もここで可能とのことであった。センターの利用については，2,600名に対して400ほどの予約が入るという。

特に強調されていたのは「剽窃に対するチェック」であった。剽窃が見つかった場合には自動的に不可(F）となるため，課題を教員に提出する前に剽窃原稿を水際で食い止める役割も同センターが担っていた。

【チューターに関して】

チューターは１週間に20時間勤務し，報酬は１時間につき12ドル70セントであった。これは，同大学での最低賃金が７ドルであることに鑑みるとその２倍近い額であるが，高い技能をもった学生チューターにはそれに見合う給与が必要との判断によるものであった。

チューターは毎学期の開始直前に４日間の訓練（朝９時から午後３時まで）が義務付けられており，学生は絶えず新しい状況に対応できるよう，変化に対応できるように意識した訓練がなされているとのことであった。

チューターの選択の有無については，マノア校と同様に，学生がチュータースケジュールを見ながら選択が可能であった。「会話の心地よさ」を感じてもらうことも継続的に足を運ばせるために重要とのことであった。

【利用者管理方法】

同センターでは学生カルテの管理にグーグルが提供する無償オフィスソフトであるグーグルドキュメント（GD）を利用していた[22]。GDを用いることで，学生の動向を追跡することが可能となり，セッション実施後のアンケートからは，同一学生の利用度・満足度といった包括的なデータの入手が可能になったという。このように，センターの実績を具体的に数値化し，透明性を持った形で自己点検と評価を進めたことは，教員への協力要請以外にも，大学側に対する運営経費請求の根拠として非常に役立っているとのことであった。

【場所の特徴】

センターで特に強調されていた点は「学生が心地よく感じられる空間づくり」であった。それには，イベント実施による“集客”も必要であるが，特に効果があったのが「食べ物を自由に口にできる空間づくり」であったという。経済的に恵まれていない学生が多いため，センターに来れば空腹が満たされ，課題も一緒に見てくれる仲間がいるという安心感が，継続的・習慣的に足を運ばせることを可能にしているとのことであった。

なお，ノエアウセンターでは他の離島に居住している学生のため，スカイプなどを用いた遠隔教育（Distance education）にも力を入れているとのことであった。この点は，ハワイの地理的条件が，日本のなかで唯一小さな島々から構成される沖縄と非常に近似していることから，その沖縄に位置する本学がこれから参考にすべき部分であると感じられた。ノエアウセンターは10年に過ぎない比較的新しいセンターであったが，そうであっても，スタッフから伝わってくる熱意と学習支援に対する強い意志は，むしろ新しいからこそ「独自の考えと方法で創り上げていく」気概すら感じられるものであり，本学が学ぶべきところは多く，大いに参考になった。

Ⅷ．むすびにかえて

以上，本稿では名桜大学におけるライティングセンターが設置されるまでの経緯について，国内外で実施した先進的事例の視察を中心に紹介した。上記視察を通じて共通して確認できた点は，書き手自身が自ら文章の問題点に気づき，修正し，内容を深められるように導くための「自立した書き手を育てる」という理念であった。また，これらの調査で明らかになった「ライティングセンターの機能的な運営，利用率向上のために特に求められる点」は，主に次の３つ，①チューターの育成（指導レベルの向上と維持），②科目との連携，③ライティングセンターの役割に関する学内周知，であった。そして何より，各大学は個々の理念に基づきながら，試行錯誤しながら運営に取り組んでいたこともわかった。

ライティングセンターは国内では未だ歴史が浅いが，しかしながらこの点については，むしろこれからセンターを開設，または，稼動させようと準備している大学にも独自の取り組みに挑戦する可能性が十分に存在することを意味している。後発のライティングセンターは，運営の工夫はもとより，チューター育成等の面などで，試行錯誤の末に多くのノウハウを蓄積した先進事例の試みから多くを学ぶ必要があるが，とはいえ，そこから個々の大学の規模や特徴，事情に合わせたオリジナルなセンターを創出し，その運営を通じて，日本全体における更なる大学ライティングセンターの発展に貢献できるはずであろう。

名桜大学は，沖縄県内では先進的な取り組みを進めているとはいえ，ライティングセンターを設置する大学としては全国的には後発組であった。しかしながら，本学ではすでにLLCやMSLCといった，学生チューターによるピア・チュータリングに主眼が置かれた既存の学習支援組織があり，それらと三位一体の関係性としてデザインされたことはある意味幸運であったともいえる。

2015年の後学期からは学生チューターの採用・トレーニングが開始し，2016年前学期からは活動の柱となる実際のライティングサポートがスタートする。例年外国人留学生が大学院生の中心を占める本学の場合，実働部隊としてのチューターは学部生中心となるため，大規模校とは異なる形でのピア・チュータリングの方法とトレーニングについても具体的な検証を進めているところである。これらの点を含めた本学ライティングセンターの挑戦とその成果についてはまた次稿に譲りたい。

注

1) 沖縄県内にも，沖縄国際大学や沖縄大学など，ライティングのサポートを行う大学はすでに存在する。しかしながら，「専任教員を擁する独立したセンター」の形態をとる学習支援組織として「ライティングセンター」が設置されるのは県内では本学が初となる。

2) 本稿で紹介する情報は視察当時のものであり，その後変更されている場合もあることに留意されたい。

3) そこでは，山里学長ご自身がハワイ大学で修士号，カリフォルニア大学で博士号を取得されたことから，日本の教育の質保証にとって米国大学のライティングセンターが見本として掲げられた。

4) その５名の委員は次の通り。⑴菅野敦志（国際学群上級准教授）〈委員長〉，⑵小嶋洋輔（国際学群上級准教授）〈副委員長〉，⑶木村堅一（教養教育センター長〈当時〉），⑷奥本正（人間健康学部スポーツ健康学科教授⑸清水かおり（人間健康学部看護学科上級准教授）。

5) 視察の日時，場所，対応者は次の通り。日時：2014年10月８日（水）場所：早稲田大学ライティングセンター，説明者：小西勝徳氏，田尻裕氏（教務部教育システム課兼グローバルエデュケーションセンター）。

なお，同大学のライティングセンターの取り組みについては，佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践―早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』（ひつじ書房，2013年）で非常に詳細に説明されている。同書はライティングセンターの運営やチュータリングに関する非常に詳細なガイドブックとなっており，全国大学の数多くのライティングセンターによって参照されている。

6) 「教育補助」は研修を経て教育的補助を行うことが可能な者であり，待遇も「教務補助」が時給1,100円なのに対して「教育補助」には2,000円が支給される。

7) 視察の日時，場所および対応者は次の通り。日時：2014年10月９日（木），場所：上智大学国際教養学部ライティングセンター，説明者：野村直美氏（国際教養学部ライティングセンター嘱託職員）。

8) 上智大学には他にも，2013年１月に開設された上智大学LLCライティングセンターがある（正確にはLLC：Language Learning Centerの下のライティングチューター制度）。これは，国際教養学部の学生のみが対象となる国際教養学部のセンターとは別組織である。LLCの運営には専属の教職員はおらず，教員３人，職員３人が兼任で業務にあたっている。チューターは大学院生が担当する。受講対象者は国際教養学部の学生以外の学生で，対応言語は非母国語としての日本語・英語。日本語の母語話者に対する日本語ライティング指導や英語母語話者に対する英語ライティング指導は行っていない。開設間もないため利用者はまだ多くはなく，今後増加が見込まれるとのことであった（言語教育推進室職員の佐藤有紀氏によるご説明）。本稿では紙幅の都合上，詳細の紹介については割愛する。

9) 視察の日時，場所および対応者は次の通り。日時：2014年10月９日（木），場所：国際基督教大学図書館事務所，説明者：利根川樹美子氏，（図書館パブリック・サービスグループ長）。

10) 視察の日時，場所，対応者は次の通り。日時：2014年10月６日（月），場所：大阪女学院大学事務所・SASSC，説明者：橋本誠一氏（学長室／総務部次長）。

11) 視察の日時，場所，対応者は次の通り。日時：2014年10月10日（金），場所：関西大学ライティングラボ，説明者：西浦真喜子助教，毛利美穂助教（教育推進部），宮田将氏（学事局授業支援グループ）。

12) 定時事務職員の時給は大学規定により1,100円とのことである。

13) 学長の意向として，本学は長期的には③を視野に入れることが提唱されているが，当面は英語ライティング指導に関してはLLCと調整を進めていくことが求められる。

14) センター長を菅野，副センター長を小嶋が務め，新たに真喜屋が専任教員として加わった以外，５名のセンター運営委員はWGと同じメンバーである。事務体制はセンター専任の臨時職員１名と学習支援センター全体の監督を担当する正職員１名である。

15) 視察の日時，場所，対応者は次の通り。日時：2015年６月８日（月），場所：早稲田大学ライティングセンター，説明者：佐渡島紗織教授（センター長），助手および大学院博士課程学生。

16) 視察の日時，場所，対応者は次の通り。日時：2015年６月８日（月），場所：創価大学中央研究棟，説明者：山﨑めぐみ准教授，池ヶ谷浩二郎氏（総合学習支援オフィス副部長）。

17) 視察の日時，場所，対応者は次の通り。日時：2015年６月９日（火），場所：関西大学ライティングラボ，説明者：毛利美穂助教，小林至道助教（教育推進部）。

18) 視察の日時，場所，対応者は次の通り。日時：2015年７月23日（木），場所：ケンダール・ホール４階（ハワイ大学マノア校），説明者：ジョージアン・ノードストロム専任講師（センター長），大学院博士課程学生（助手）。

19) かつて組織が図書館に属していた時もあったという。その際には，ノードストロム先生の所属する英語学科の建物から徒歩５分の距離であったとはいえ，頻繁にセンターに顔を出してチューターや学生の様子をみたり業務に関する指示を出したりするうえで，徒歩

５分の距離は障害であったという。そのため，図書館から英語学科の建物に移動させ，現在では１日に何回も部屋に出入りをして活動状況のチェックができるようになったとのことである。

[20] 視察の日時，場所，対応者は次の通り。日時：2015年７月24日（金），場所：ノエアウセンター（ハワイ大学ウェストオアフ校），説明者：ロケラニ・ケノリオ氏（ノエアウセンター長），カイウラニ・アカミネ氏（同センター・テスティングコーディネイター）および２名のチューター・コンサルタント。視察に際しては，ウェストオアフ校のジョイスチネン教授（マノア校沖縄研究センター長を兼任）による紹介と案内を受けた。

[21] この「ノエアウ」とは，ハワイの言葉で「to be skillful」（多くのスキルを身につける）という意味であり，ここがまさに学生が学ぶうえでのスキルを身につけるための学習支援センターであることを意味する名称となっている。

[22] 以前は紙の用紙を使って情報を収集と管理を行っていたが，最初から学生に電子フォームに直接入力してもらうことで，余分なコストをかけずに経済的かつ効率的な情報管理が可能になったとのことであった。この方法は非常に示唆的であったものの，MWCでは学生の個人情報の保護という観点からGDを利用する方法は見送られることとなった。